

## 若きモテ老人の悩み

Greatchain

July 5, 2025

実はこのエッセーを書く決心をした深刻な理由がある。

最初、私はただ一片の俳句を書き、それ以上何も言わずに読者に提供しようとした。しかし、これはあまりにも奇を衒うだけでなく、読者に失礼だろうと思いなおして、その計画をやめた。奇妙な話だが、私の書くものが下書きだろうと、予定の取り消しだろうと、どういうわけか直ちに知られてしまうことがある。

今、これを書くことにするが、それは――

花嫁にむせぶ我あり老いて春

というもので、これは夢に見たことが基になっているが、俳句というものは即興でできるものでなく、何度も書き直して候補を絞り、それで折り合いをつけるものであることは誰でも知っているだろう。しかしそれでも百パーセント満足ということはなく、舌足らずを我慢する業であることは、どんな俳句の名人でも同じであろう。

その夢に出てきた女性が誰であったかわからず、私の知る人でなかったことだけは確

かだが、その時に私に非常に強い感情だけが起こった。それは無限の切なさというべきもので、私には経験のないものである。

ただ一つそれに近いのは、数か月前に私が見て、このブログで報告したことのあ  
る、「巨大な猛禽を抱き寄せてみると、それはさめざめと泣いていた」あの夢である。

私には奇妙なことがよく起こり、ある人（確かアメノミナヌシ）が私の創作過程を知っているかのように話して私を驚かせた。私がある特定の人に手紙を書いて、あるいはただ不特定多数の人に物を書いて、パソコンの脇に置いておくと、誰かに読まれている（としか考えられない）ことが時たまある。特にタロット・リーディングなどでは感情を正確に読まれることがある。

私がこの俳句を書いて破棄しようとしたのは、読者に失礼かと思ったからだけではない。私は人々に自分の心の中を知られたくなかった、あるいは軽率に読まれたくなかったからである。私は自分が女性的側面を強くもつ人間であることを、よく知っている。

このことから、私は特に女神様たちから、好かれているのではないかとホクソ笑んでいる。そして私はこれを恥ずかしいとは思っていない。しかし、これを私の弱点だと考える人々がかなり多いだろうと思っている。「男子たるもの」そのような女々しい感情に溺れるべきではない、という常識がこれまで世界を支配してきた。しかし次第

にそうではなくなりつつある。

特に（短歌ではない）俳句では、そのような感情を好まれないだろう。私はここで、その常識をあえて破った。そしてこれは私の「武士道」に反するものではない。

「愛」というものは、その両面を併せ持つものでなければならない。

私は過剰にモテる人間であることは確かなようである。しかし極度に怖がられる人間でもある。なぜそういう人間ができたのだろうか？ これは冗談や傲慢で言うのではない。これは宇宙的な研究課題でなければならない。